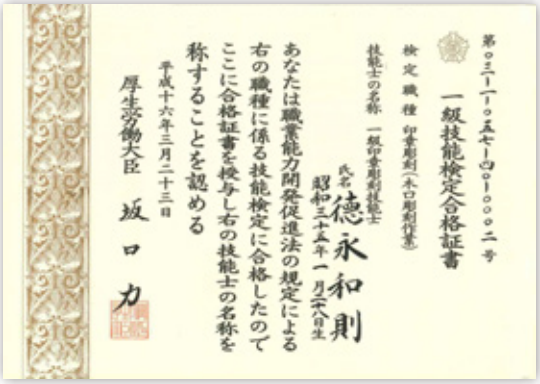
古くから繋がる文化を守り伝えていきたい

有限会社 正信堂
代表取締役 徳永 和則 さん


第〇三一一〇五七一四一〇〇〇二号

一級技能検定合格証書

検定職種 印章彫刻（木口彫刻作業）

技能士の名称 一級印章彫刻技能士

氏名 徳永和則
昭和三十五年一月二八日生

あなたは職業能力開発促進法の規定による右の職種に係る技能検定に合格したのでここに合格証書を授与し右の技能士の名称を称することを認める

平成十六年三月二十三日

厚生労働大臣 坂口力

1級技能検定合格証書

作業の様子

今回の夢追い人は、はんの正信堂の徳永さんにお話を伺いました。

彫る技術

正信堂は昭和三十二年創業。

「幼い頃から継ぐという意識はあまりありませんでしたが、印章作りが家業であるという意識はありました」

大学を卒業後、神奈川県横浜市に在った印章高等職業訓練校へ進み、三年間学ぶと同時に神奈川県内の店舗で修行を積まれてから大川に戻られたそうです。

「大川に戻ってきてから三十五年ほど経ちます。目を酷使する作業が多いので、目はぼろぼろですね。老眼が出てからは以前よりも辛いこともありますが、まだまだ現役です」

ひとつひとつ手作業ではんこを作られている徳永さん。

「彫る際に使用する彫刻刀は、刃の使い方としてはノミによく似ています。これらを扱う技術も大切ですが、刃を研ぐ技術もなければ仕事ができませんね。切れが悪いと仕事の効率も悪いし、良い仕事ができませんから」

はんこを彫り始めて四十年近くが経ったとも話された徳永さん。様々なはんこを彫られてきたなかでも特に細かい、直径十五ミリの円に三十四文字彫られているはんこを見せていただきました。

「福岡県の職業能力開発協会の事業の一環で、年に三回ほど県内の小学校へ出前授業に出向いています。そのなかで生徒たちにも石の材料に一文字彫らせていますが、プロはこんなにすごいんだぞ！という見本として見せているものです」

店内の様子

34 文字彫られたはんこ

一文字の大きさは二ミリ程度とのこと。

「一ミリは大きいという尺度の世界になります。とても細い線を彫り出す作業になるため、ごくごく稀に途中で折れてしまうこともあります。そうすると一からやりなおしです。彫るときは息を止めて集中して彫っています」

はんこの材質は象牙、牛の角、木材など様々。

「化学合成の材質もありますが、うちは主に天然素材にこだわっています。象牙は硬いので掘るのに時間がかかりますが、その分、線が綺麗に出ます。木材だと木の中でも硬い柘植の木を使っていますが、他と比べると彫りやすいですね」

大変高い技術をお持ちの徳永さん。一級技能士とものづくりマイスターを所持されているそうですが、どれくらいのスピードで彫ることができるのでしょうか。

「どうしてもすぐに欲しい、間に合せで良いからというときは、最短三十分程度で彫ることもできます。ですが、実印や銀行印に使用したい場合は、中二日から三日程度頂けたほうが良いですね。明日実印登録しなくちゃいけないんです！というときは、二十四時間頂ければ間に合わせることもできます」

職人としての信用

多種多様なはんこですが、彫られる書体は主に六書体とのこと。

「極稀にですが、印鑑登録の窓口から『これはどう読むんですか』という問い合わせもあります。基本は右上から縦に。姓だけの横書きは右から左に読みます。また『この文字はどんなふうになりますか』と尋ねられたときに、すっと書けないといけないと思っています。ほとんどの文字は頭に入ってますね」

はんこの無店舗販売（通販）も多く見かけるが、良し悪しがあるとも話された徳永さん。

「人件費などがかさまない分、安く提供されていますが、職人の目から見ると気になる点が結構ありますね。例えば機械を使って彫りっぱなしで仕上げが全く施されていなかったり、フォントの文字をただ並べて機械で彫られたものだったり。そういうものが最近は多いですね。それで良しと思われるのか、ちゃんとしたものが欲しいと思われるのかは個人の自由です。ですが、せっかく印章の文化のある国で暮らしていますから、私達が印章の良さなどを正しくプレゼンしていく能力が必要なのかなと思っています」

徳永さんご自身もホームページやブログなどで印章について発信されているとのこと。

「時々ホームページを見ましたと言ってご来店される方や事前にメールで来店しますと言われる方がいらっしゃいます。一度ホームページを見られているからこそ、それなりのものを期待されていると思うし、他店のページも見られて比較された上で選んで頂いているとも思っています。職人として信用していただけているということだと思って仕事に取り組んでいます」

文化を繋ぐ

毎年十月一日は印章の日とのこと。その前後に世界文化遺産の京都・下鴨神社で印章祈願祭が行われているそうです。

「境内に印納社と呼ばれるお社があります。そこでご不要になったはんこの供養を行います。大事だけど消耗品でもあり自分で処分できないものの最たるものがはんこだと思います。そういった不要になったはんこが全国から集められ、供養されています」

その他にも、業界としてはんこのことを広く知ってもらうために行っている事業があるとのこと。

「小学校への出前授業や全国で巡回して日本の印章展などのイベントを行い、より身近に印章文化を感じていただこうと工夫しています。今年は東京・浅草で開催したところ、国籍問わず、大変好評だったと伺いました。数年前に福岡で開催された際には、私も彫刻の実演で参加しました。世界のほとんどは、自署のサイン文化です。政府機関などで押されるスタンプは存在しますが、あくまで行政のスタンプであり、個人で所有している個人を認識するものではありません。昔は中国や韓国も印章の文化がありましたが、現在は日本と台湾ぐらいでしか利用されていませんね」

日本人の生活に深く根付いているはんこ。そんなはんこ文化を守っていくことが夢だとお話されました。

「今年の改元の際に、上皇から今上（きんじょう）天皇へ三種の神器と共に国璽や天皇御璽などが渡されていました。天皇陛下のご公務のひとつにもはんこが使われています。魏志倭人伝の頃から捺印の文化はありました。個人の認証のために個々が所持するようになったのは、明治の太政官布告の頃からですが、それでも百年以上が経っています。日本の歴史、くらしと深く結びついた印章文化をこれから先も、守り伝えていきたいですね」